

ユニセフ年次報告 2003

2003年1月1日～12月31日(2004年発行)

For every child
Health, Education, Equality, Protection
ADVANCE HUMANITY

unicef 

ユニセフの優先事項

2002年～2005年にかけて、ユニセフは次のことを実現するために努力する：

すべての子どもたちが、あらゆる生存のチャンスを与えられ、人生の最良のスタートを切ることができるよう、必要なサービスを受けられるようにする

すべての子どもたちが予防接種を受け、病気や障害から守られるようにする

すべての男の子、女の子が質の高い初等教育を修了できるようにする

すべての若者たちがHIV/エイズの予防に関する信頼できる情報を得られるようにし、HIV/エイズで影響を受ける孤児やそのほかの人たちがサポートとケアを受けられるようにする

すべての子どもが、平和のときも、紛争や緊急事態のときも、危害、虐待、暴力から守られるようにする

目次

はじめに	
国連事務総長、コフィ・A・アナンからのメッセージ	2
ユニセフ事務局長、キャロル・ベラミーからのメッセージ	3
幼少期に投資する	5
すべての子どもに予防接種プラスを	9
女子教育を推進する	13
HIV／エイズの脅威を克服する	17
子どもたちを暴力と搾取から守る	21
舞台裏の効率性と優秀性 ^{エクセレンス}	24
ユニセフの約束	28
国内委員会	30
グローバル・パートナー	32
国レベルでの企業提携	34
ユニセフ親善大使	35
リソース（資源）	36
表と図	
ユニセフ収入の内訳（2003年）	37
ユニセフの収入（2000-2003年）	38
カントリー・プログラム 通常予算による事業	39
ユニセフへの1人あたりの拠出額（1人あたりの収入との比較において）	41
ユニセフの優先分野別の事業支出額（2003年）	42
ユニセフ通常予算への上位20拠出国（2003年）	43
ユニセフ通常予算への上位20拠出ユニセフ国内委員会（2003年）	43
ユニセフ：政府と民間の拠出額、2003年	44
世界で活動するユニセフ	50
（財）日本ユニセフ協会 2003年度の活動	53



ユニセフの使命の原動力になっているのは、つねにコラボレーション（協働）である。その使命とは、すべての子どもが保健、教育、平等、保護の権利を享受できるようにすること。今年の「年次報告」でも分かるように、ユニセフは政府、ドナー、コミュニティ、子ども自身と協力して、この世界を子どもにふさわしい、さらにはすべての人にふさわしい世界にするよう努力している。

本報告書は、ユニセフとそのパートナーが、子どもの死亡率の削減、学校の出席率の向上、子どもの保護に関する法律の強化のために、どのようなことを行っているのかを要約したものである。また、本報告書を通して、子どもの権利が緊急事態、例えば戦争や自然災害などの理由で剥奪されたり、ジェンダー、貧困、病気によってないがしろにされないよう、ユニセフが子どもを暴力、搾取、差別から守るために断固とした意志を持って活動している様子もうかがい知ることができるはずである。

子どもの健康と幸せは、ミレニアム開発目標を達成するために必須のものであるばかりでなく、人々の人道性と世界の団結力を示す尺度でもある。だと言うのに、2000年のミレニアム・サミットで採択した目標に向けての進捗具合は、決して均一ではない。2015年の目標年度までに目標を達成すべく、世界的に軌道を修正しながら、私たちが断固とした意思を持って、たゆまぬ努力を続けなければならない。今の世代、あるいはその先の世代に対して約束を果たすためには、やり残したことがたくさんある。

コフィ・A・アナン
国連事務総長

新しい年を迎えるたびに、私たちはその年が子どもたちにとっていい年になることを願う。医療面での画期的発見、学校での出席率の上昇、開発を進める努力などを見ていると、思わず楽観主義が頭をもたげる。年の終わりに1年を振り返ると成功が見えてくる。でも、逆に、解決されていない課題も浮き彫りになってくるのだ。

おとなたちは、仲良くすることよりは敵意を好み、人より利益を優先し、寛容よりテロを求め、往々にして子どもたちを危険に陥れている。この1年もそうであった。武力紛争、破滅的なテロ、経済の停滞、不寛容、差別が、この1年を若者にとって困難な年としてしまった。予見できないながら、何度も襲ってくる自然災害は、無数の命を奪った。HIV/エイズは容赦なく家族、コミュニティ、国家を襲い、大きな影響を与え続けている。

ユニセフは、2003年に、子どもたちが直面した厳しい現実を少しでも和らげるために、ほかのパートナーと共に努力した。大きな事業から小規模なプロジェクトまで、ユニセフは、政府、ドナー機関、非政府組織（NGO）、宗教的理念に基づいて社会活動を行う団体、コミュニティ、子どもたち自身らとコラボレーションを組み、若者の権利を推進するために頑張った。また、国連改革の一環として国連事務総長により創設された国連開発グループのオリジナル・メンバー機関として、ユニセフは国レベルでの開発を進めるために、ほかの国連機関と共に活動を行った。

「年次報告2003」は、ミレニアム開発目標を達成するためにユニセフが作成した青図、中期戦略計画を取り上げている。目標達成のための道のりは厳しく、障害も多い。この年はイラクの子どもたちを戦争の被害から守ることに始まり、イランでの大地震に対応するため、現地での本格的な活動で年末を締めくくった。その間、予防接種キャンペーン、バック・トゥ・スクール・キャンペーンを支援し、飢餓を終わらせるために努力を払い、子どもの搾取、HIV/エイズの広がりを防ぐ支援を行った。



本年次報告は、子どもとその家族のために安全で健康な世界を作りたいと願う多くの人たちの勇敢な努力に目を向けたものである。特に任務中に命を落とした勇者、クリス・クライン・ビークマンに敬意を表したい。彼は、バグダッドでの国連建物の爆破でほかの国連職員と共に命を落としたが、彼の理想や子どもたちへの情熱は、遺志として受け継がれている。

ユニセフは、すべての子どもたちが生命、保護、成長する権利を主張できる日まで、活動を続ける。この年次報告は、ユニセフとそのパートナーがその日に向かって前進し、飛躍する様子を垣間見させてくれるものである。

キャロル・ベラミー
ユニセフ事務局長



幼少期に

投資する

子どもにとって人生の最初の数年は、将来への基礎作りの時期である。世界中の親や家族が、子どもたちが生きながらえ、社会の中で活躍できるようにと、必要と思われることを子どもに与えるために必死になる一方で、基本的なケアさえも受けられずにいる子どもが何百万人もいる。毎年、1,100万人の子どもたちが5歳の誕生日を迎える前に命を落としているのである。たとえ5歳の誕生日を迎えることができたとしても、多くの場合身体的、精神的、知的に障害を負い、本来の可能性を開花させることができなかつたり、また、その子が生まれ育った国家にとっても大事な資源を失わせる結果に終わっている。

これは子どもや家族にとって悲劇であるばかりでなく、人間開発や経済開発の考え方からも長期的視野に欠ける。数々の調査結果からも、子どもたちへの投資は極めて大きな還元をもたらすことが分かっているのである。

人生最良のスタート

ユニセフは子どもの総合ケアに4億4,000万ドルを投資し、子どもたちが明るい未来を築くことができるよう、確固たる基礎作りを支援している。

子どもの運命を少しでも良い方向に向かわせる努力は生まれる前から始まる。乳児のケアは、つまり母親のケアから始まるのである。出産中に母親が命を落とすと、その子は、両親のもとで育つ子どもよりも、2歳未満で死亡する確率が10倍も高くなる。母親の死亡率を下げる最も効果的な唯一の方法は、緊急時の妊産婦ケアを高めることである。

ユニセフは、世界中の緊急時妊産婦ケアを改善するために多くの努力を払い、アドボカシー、社会的動員、研究、直接サービスを実施している。2003年に、ユニセフは80カ国の3,400の保健施設で、母親の命を救うケアを支援した。

ユニセフは米国ニューヨークのコロンビア大学とパートナーシップを組み、「妊産婦死亡と障害の防止」というプロジェクトを実施した。これは開発途上国と国際機関が連携して、緊急時妊産婦ケアの整備、品質や使用の改善に努力するプロジェクトであるが、その努力が実を結び、例えば、バングラデシュ、ブータン、ネパールが今では国家主導の緊急時妊産婦ケア・プログラムを実施している。

妊産婦ケア、つまり妊産婦が適切な栄養・保健サービスを受けることは、子どもが将来、その可能性を開花するために必須なことなのである。エチオピアでは、ユニセフは補助食糧プログラムを35の地区で、6万人以上の妊産婦、授乳中の女性、栄養不良の子どもたちを対象に実施した。

現在、毎年生まれてくる子ども1億3,200万人の内、約5,000万人の乳児たちが出生登録されないままにいる。出生登録は、国が子どもをひとりの市民として認める最初の正式な行為である。子どもがもし出生登録されない場合は、暴力や搾取からの保護、保健ケア、教育、そのほかの社会サービスを受けられない可能性がある。後には、パスポートを手に入れることができなかつたり、結婚許可証を受けることも、正式な仕事に就くこともできなくなる可能性もある。基本的権利を享受できなければ、こうした子どもたちは貧困という運命に翻弄される可能性が高くなる。ユニセ

フは85カ国で出生登録の促進に力を貸し、2001年に中期戦略計画を打ち出したときの75カ国に比べ、数は増加している。

子どもにとっての不可侵の権利

安全な飲み水とトイレを使う権利ほど基本的な権利はない。だというのに、安全な飲み水が手に入らない、衛生状態が悪い、衛生的習慣が欠如しているなどの理由から15秒にひとりの割合で子どもが命を落としているのである。毎年約200万人の子どもが下痢性疾患にかかり、内88%は安全でない飲み水、衛生状態の悪さ、不衛生な環境を原因としている。ユニセフは家族やコミュニティに安全な飲み水、衛生施設、衛生教育を提供し、91カ国でこれらの状況の改善に努力している。

グアテマラでは、地域により、乳児と妊産婦死亡率を25%下げることができた。それは、乳児たちに良いケアを提供できるよう多角的な努力をした結果、安全な飲み水と衛生施設を13の都市部で提供できるようになったからである。朝鮮民主主義人民共和国で、ユニセフと政府は、大規模な水の改善事業に乗り出し、費用対効果の高い重力式の給水システムを導入した。プロジェクトは3つの地域で、完成あるいはおおかた終わり、小さな子どもの45%と母親の35%が栄養不良状態にある北東部の2つの新興都市部でも始まった。今では約200万人が、浄水された安全な飲み水を手に入れることができ、1万家族が水道を使うことができるようになった。

必須な要素

赤ちゃんが健やかに成長する可能性が劇的に高くなるのは、保健ケア、栄養状態、感性・身体的刺激、危害からの保護が適切な場合である。しっかりした未来のためにはこれらの要素が欠かせない。だからこそ、ユニセフは早期の乳幼児総合ケア・プログラムを実施しているのである。

ユニセフが支援する非政府組織のネットワークは、ペルーのアマゾン川流域とアンデス地域で、グッド・スタート・プロジェクトを実施し、子どものための早期の乳幼児総合ケアを提供した。コミュニティを中心とするこのプロジェクトは、46,000人以上の子どもたちと20,000人の妊産婦を対象に実施され、子どもたちに保健ケア、栄養、安全な飲み水、心理社会的な刺激を提供することができた。

微量栄養素は、子どもたちに最良のスタートを提供する上で必須のものである。ヨード欠乏症は、クレチン症、甲状腺肥大、身体的発達への障害をもたらし、子どもの学習能力に障害をもたらす場合がある。世界的にはヨード添加

塩が手に入りやすくなっており、民間と公的セクターとがパートナーシップを組めば大きなことが実現できることが証明されている。ユニセフ、パンアメリカン保健機関と世界保健機関（WHO）が支援する、塩のヨード添加推進のためのアドボカシー・キャンペーンは、ボリビアでのヨード添加塩の生産量を増加させるのに役立ち、2000年に65%だった生産割合は、2003年には85%にまで上がった。

母乳は、生後6カ月までの乳児に与える栄養としては完璧なものである。母乳の中には、乳児に必要なすべての栄養、抗体、ホルモン、免疫学的因子が含まれており、6カ月までの乳児への母乳育児を世界的に実施すれば、毎年推定150万人の命を救うことができるのである。ユニセフはNGOのヤヤサン・エア・スス・イブ・インドネシアとパートナーシップを組み、インドネシアの中央ジャワ、東ジャワ、ジャカルタ、南スラウェシ、西ジャワの各州で、母乳代用品市場のモニタリングを行った。研修で新しい技術情報を身につけた25人の政府、市民社会のパートナーたちは、母乳代用品の販売流通に関する国際規準に違反する行為の洗い出しに乗り出したのである。

両親に対する教育は、子どもの体だけでなく、心の面での子育てや滋養が必要であることを家族に理解してもらうために必須の手段である。ヨルダンでは、14,000人の母親と父親が「より良い子育て」プロジェクトに参加した。親たちは子育てについて、そして子どもがより良い人生のスタートを切れるようにするための子どものケアについて、16回の講義を受けた。





妊産婦と母乳育児中の 母親にとって良いケアを

コンゴ民主共和国カポロウェの村では、シャンガレレ湖が村人たちに栄養たっぷりの食糧を提供している。しかし、その一方で、湖が蚊の温床にもなっており、コミュニティにとって、とりわけ妊産婦や母乳育児中の母親、そして赤ちゃんにとって脅威となっている。これらの人たちにとって、蚊が運ぶマラリアは、ひどい貧血を引き起こすものになったり、最悪の場合は死に至らしめることもあるのだ。

「今月のテーマはマラリア、」と語るのは「コミュニティ中心の栄養チーム」のママ・ジャスティンである。「そして蚊帳の使用についてです」

ママ・ジャスティンとカポロウェから来た4人の「ママ」たちは、いずれもこの栄養チームの一員で、討論のために集まったグループをうまく導いていく。今日は、母親になりたての女性と、お腹に赤ちゃんがいる女性を通りかかるのを目に留め、チームのひとりが、蚊帳について説明をするから聞いていくようにと促す。殺虫効果のある蚊帳は、子どもや母親たちの命を救うことになるかもしれない、と説得できればと願っているのだ。

政府とユニセフから支援を受けているこのチームは、出産前の母親たちのもとを訪ねたときや、予防接種のフォローアップの際に、こうしたハイリスクな人たち向けに蚊帳を提供している。蚊帳の使用を促すだけでなく、妊婦には、出産前検診に来るよう促し、その場で提供される1回ごとの鉄分補強剤をきちんと摂るよう説得するのだ。

「コミュニティ中心の栄養チーム」は赤ん坊の健康、特に栄養状態の改善に活動の中心を置いている。そのため、プログラムでは妊産婦や母乳育児中の女性たちのケアに重点が置かれている。生後6カ月は母乳だけを子どもに与え、望まない妊娠を避けるよう力説し、コミュニティ・チームは、妊娠中に適切な食糧と微量栄養素を摂る必要性を教える。また、家族には、効率的に食べ物を育てる方法、栄養を壊さぬように調理する方法なども教える。これらはすべて健康な赤ん坊を育てるのに役立つ知識なのである。

栄養豊かに子どもを育てる方法として、「コミュニティ中心の栄養チーム」は母子保健ケアの模範となっているのだ。



すべての子どもに

予防接種プラスを

ワクチンで予防可能な病気で命を落としている子どもは、毎年200万人以上。さらに何百万人もの子どもたちが、予防可能な病気をもたらす影響から保護されていないために、病弱な体になってしまう。ワクチンがないため、あるいは、保健センターがなかったり、設備が整っていないために、また、家族に十分な情報が伝わっていなかったり、間違った情報が伝わっているために、3,000万人以上の子どもが予防接種を受けられずにいる。予防接種プラスは、子どもの死亡率を削減し、生き長らえる子どもたちの人生全体の質的向上には必須のものなのである。

予防は費用対効果が高い

財政的な見地から見れば、すべての子どもに予防接種を受けさせ、必須の微量栄養素を提供することが重要である。ワクチンの価格は決して高いものではないが、病気や身体的障害をもたらす代償は測りきれないからだ。

ユニセフは2003年度には、ワクチンに約3億4,800万米ドルを支出し、途上国の子どもの40%にワクチンを提供した。何百万人もの人たちがそのおかげで、はしか、ポリオ、ジフテリア、百日咳、破傷風、結核、黄熱病、B型肝炎から守られたが、ワクチンの価格は、平均で子どもひとり50セント程度なのである。

インドでのポリオの予防接種キャンペーンでは、130万人以上のボランティアと保健員が家から家へと回り、5歳未満の子どもほとんどすべてに予防接種を施した。この壮大

なる努力の結果、2002年には1,556件だったポリオの発症件数が、2003年には223件にまで削減できた。

2003年12月、ユニセフはイランで全国ポリオ予防接種キャンペーンを展開。このキャンペーンのおかげで、その月の後半に起きたバムでの大地震の際には、多くの人々がこの病気から守られることになった。

ユニセフに支援された約14,000人のボランティア保健員が、イラク戦争が始まる前、400万人の子どもたちにポリオの予防接種を施した。ユニセフは、2,500万滴のワクチンとコールドチェーン機器を提供し、大規模な戦闘が終了したすぐ後に定期予防接種を再開できるようにした。

すべての乳幼児への予防接種の実施率を上げ、維持するために、ユニセフは、世界保健機関（WHO）と協働で、ワクチンの品質と安全に対する民衆の信頼を得るべく尽力した。ユニセフは宗教団体やメディアとともに活動する際の手引きをガイドブックの形にして発行し、国際ジャーナリストや地元ジャーナリスト、保健スタッフには、子どもを病気から守るための予防接種推進に関する研修を実施した。

はしかは毎年100万人近い子どもたちの命を奪っている。11月にはギニアで、全国予防接種キャンペーンが行われ、はしかの根絶に向けて、6カ月から14歳までの350万人の子どもが予防接種を受けた。

ペルーで、ユニセフは船を7隻、50リットルの太陽電池駆動型の冷蔵庫を5台、そのほかの機器を提供し、2つの少数民族を全滅の危機から救うべく支援した。アマゾンの高地に住むカンドーシとシャルパ民族は、B型肝炎がなくなければ民族が地球上から姿を消す危機に陥っている。ユニセフは、すべての乳児がこの恐ろしい病気から守られ、悲劇を回避できるよう支援している。

ユニセフは、子どもだけでなく、子どもを産むことができる年齢の女性たちに、妊産婦破傷風と新生児破傷風の予防接種を実施している。妊産婦破傷風と新生児破傷風を根絶する努力は、ユニセフがリーダーシップをとりながら、公的機関や民間機関などとパートナーシップを結んで52カ国で実施されている。これらの国々では、毎年新生児180,000人が破傷風で命を落とし、30,000人の母親の命も奪われている。2005年までに破傷風を根絶する目標を掲げているところである。

ユニセフは、ビル&メリンダ・ゲイツ財団、世界保健機関（WHO）、そのほかのパートナーと共に、GAVI（ワクチンと予防接種のための世界的同盟）に名を連ねている。GAVIの一員として、ユニセフは、世界のリーダーあるいは地元のリーダーたちに呼びかけ、予防接種を最優先事項にするよう促している。キャロル・ベラミー事務局長は、2003年度のGAVIの議長を務めた。

予防接種プラスでの「プラス」とは

ユニセフは、予防接種を実施する際、命を守るそのほかのサービスも提供することにしている。最低でも、「プラス」とは、ビタミンA欠乏症が蔓延している国で、小さな子どもにビタミンAの錠剤を提供することを意味している。少なくとも、1億人の子どもがビタミンA不足に苦しんでいるが、ビタミンA不足にかかると、免疫システムが弱まり、視覚障害に陥ったり、はしかや下痢性疾患で命を落とす危険性が高まるのである。

政府と国連機関が協同して行っている「ビタミンAグローバル・イニシアティブ」の一環として、ユニセフは2003年2月に、コンゴ民主共和国の子どもたち約1,200万人にビタミンAを提供した。アゼルバイジャンでは、調査結果により、5歳未満の子どもの約80%がビタミンA欠乏症の状態にあり、25%は重度の欠乏症であることが分かった。そこで、ビタミンAの補給を国の拡大予防接種プログラムに組み入れることにしたのである。

マラリアは、アフリカの子どもの死亡原因の主要要因となっている。世界保健機関（WHO）と4月に共同発行した『アフリカ・マラリア・レポート』では、蚊が媒介するこの病気で、アフリカの子どもが30秒にひとり命を落としていることが報告された。マラリアの流行地域では、子どもを殺虫処理された蚊帳の中で寝かせるだけで、子どもの死亡率を20%削減できる。予防接種キャンペーンの間、保健員たちは殺虫処理された蚊帳をロール・バック・マラリア・キャンペーン（マラリア根絶のためのキャンペーン）の一環として配布することもある。

ユニセフはこの蚊帳を購入し、配布するリーダーとなっており、2003年度には1,800万米ドル以上を蚊帳と殺虫剤に支出した。これらの蚊帳の多くは、予防接種イニシアティブの間に提供されたのである。ガンビアでは、マラリアが5歳未満児の子どもの死亡原因のナンバーワンだが、ユニセフは、殺虫処理が施された蚊帳の配布を組み込んだ大規模キャンペーンを支援した。8日間に及ぶキャンペーンの間、787の村で94,000張以上の蚊帳に殺虫処理が施され、川の河口地域で82%、川の中央地域で81%の世帯で利用されるようになった。キャンペーンでは、32,519張の蚊帳が配布され、295,307人にサービスが届いた。





「どんな形の支援もケアも、彼らにとっては大きな意味があるのです」

21歳のロマ人、マヌエラ・ムスタフォヴッチは、まさか子どもたちに予防接種が必要だとは思ってもしなかった。セルビア・モンテネグロのフラニャの町では、彼女と同じような母親たちがたくさんいる。ユニセフとセルビア保健省、並びに公衆衛生機関が、移動型の予防接種チームを派遣するまで、赤ん坊たちは一度も医者にかかったことがなかったのである。このチームが現われるまで、政府の目には、ロマの人々は（おとなも子どもも）存在すらしなかったのだ。それというのも、出生登録がなされていなかったからである。出生登録なしでは、保健ケアも政府の支援も受けられず、学校に行くこともできない。でも、フラニャで実施された支援プロジェクトのおかげで、2003年度には3,816人の子どもと3,016人の女性たちが出生登録され、1,560人の子どもたちが健康を脅かす病気の予防接種を受けることができた。

移動型の予防接種チームは8つの地域で活動し、普段はサービスの提供がなかなか受けられない人たち（その多くがロマの人々）に、予防接種を行い、微量栄養素と情報を提供している。このプロジェクトでは、医療ケアのほかにも、社会サービス、子どものケア、教育なども提供されているのである。

このプロジェクトが成功している理由は、村の中でも中心となる場所（学校、事務所、個人の家までも含む）に包括的なケアを持ち込んだことにある。そこでは母親たちが子連れで並び、健康診断、注射、衣類、衛生品、お菓子などの配布を受けることができるのである。親たちは子どもを健康に育てるにはどうしたら良いか、政府のサービスを受けるにはどうしたら良いかなどのアドバイスも受けることができる。

プロジェクトの調整官であるゴランカは、移動型予防接種チームのおかげで子どもたちの命が救われたことを知っているが、ロマの家族もそれに報いるに十分なことをしたと言う。専門家たちは、彼らから柔軟性と感謝することを学んだと言うのだ。

「彼らのほとんどは、とても普通とはいえないような厳しい状況で暮らしています。電気も水道もなく、仮の宿に身を置き、衣類も履物もない生活をしているのです」とゴランカ。「どんな形の支援もケアも、彼らにとっては大きな意味があるのです」